

# 青森県近代文学館報

## 特別展「西北五文学散歩」開催

会期 平成二十二年七月十日（土）～九月五日（日）

青森県近代文学館では、七月十日から九月五日までの会期で、特別展「西北五文学散歩」を開催します。

青森県の西北部は、五所川原市、つがる市、中泊町、板柳町、鶴田町、鱒ヶ沢町、深浦町の二市五町で構成され、西北五地区と呼ばれてきました。

西北五地区の北は津軽海峡、西は日本海に面し、西海岸南部の背後には世界遺産・白神山が迫っています。白神に源を発し津軽平野を潤す岩木川は、北上して河口付近で十三湖を形成し、やがて日本海に注ぎます。

この地は、太宰治の小説「津軽」の主要舞台となり、田山花袋「山水小記」、谷崎潤一郎「颯風」、松本清張「風の視線」など、中央の著名な文人の作品に描かれました。

また、かつてこの地を訪れた若山牧水、与謝野寛・晶子夫妻らの文学碑、地元出身の太宰治、成田千空の文学碑などの文学遺跡も多く、地域における文学活動も盛んです。

本展は、明治以降に西北五地区を描いた文学作品を紹介しながら、この地域の持つ魅力に迫るものです。



左から十三湖、岩木山、日本海



太宰治『津軽』  
昭和 19 年 11 月 15 日  
小山書店刊

### 目次

- ・特別展「西北五文学散歩」開催…1
- ・「太宰治生誕一〇〇年特別展」開催の記録…2・3
- ・今官一 生誕一〇〇年展に寄せて(今公忠)…4
- ・企画展「今官一 生誕一〇〇年展」開催報告…5
- ・父の思い出を語る時(高木ノブ)…6
- ・企画展「生誕一〇〇年 菊岡久利の世界」開催報告…7
- ・企画展「鳴海要吉 没後五〇年」開催報告…7
- ・企画展「新収蔵資料展」開催報告…8
- ・第八回青森県近代文学館川柳大会、パネル展開催…8
- ・資料寄贈者紹介…9～11
- ・ギャラリートーク実施…12
- ・青森県近代文学館 今週のお宝、館務日誌…12

### 平成二十二年度企画展

#### □企画展「白木茂生誕一〇〇年展」

四月十七日(土)～五月三十日(日)

三戸郡向村(現南部町)出身の白木茂は、児童文学翻訳者として活躍。『少女シートン動物記』をはじめ、名作物語・SF・ノンフィクション等、三百冊以上の著書を残しました。その生涯と業績を概観し、三戸との関わりや同郷の馬場のぼるとの交流も紹介します。

#### □企画展「竹内俊吉生誕一一〇年展」

十月九日(土)～十一月二十一日(日)

竹内俊吉(現つがる市木造出身)は「東奥日報」記者時代、文芸誌「座標」を創刊し、県内の文化運動をリードしました。ラジオ青森創設後、衆議院議員となり外務政務次官などを歴任。昭和三十八年から青森県知事を務め、県政の発展に尽力しました。その生涯と業績を振り返ります。

#### 常設展示室展示替え

四月一日から、常設展示室の一部展示替えを行います。新たに展示する文学資料の中から主要な三点を紹介します。

◎葛西善蔵―書幅「碧落碑無贖本」(葛西善蔵最晩年の書。井伏鱒二旧蔵、ふくやま文学館所蔵資料の複製。)

◎富士幸次郎―色紙「われ等を限りたる運命を認識し、承認し愛せよ。モオリス・バレス」(富士幸次郎が大正十三年から展開した地方主義運動の募金のために書いた一枚。)

◎太宰治―芳名帳「千紫万紅」(太宰治の第一創作集『晩年』の出版記念会／昭和十一年七月十一日・上野精養軒の芳名帳。)

#### 資料集刊行

資料集第六輯として『青森県近代文学年表』を刊行しました。当館の初代館長を務めた小山内時雄(弘前大学名誉教授)が手書きで編集した「青森県近代文学年表稿」をもとに、加筆・修正を行い活字化したもので、本県初の本格的な近代文学年表です。巻末に、舘田勝弘氏(青森県郷土作家研究会代表理事)の解説文を収録しています。

「太宰治生誕一〇〇年特別展」開催の記録

会期 平成二十一年七月十一日(土)～九月六日(日)

明治四十二(一九〇九)年六月十九日、青森県北津軽郡金木村(現在の五所川原市)に生まれた作家太宰治の生誕一〇〇年を記念し、「太宰治生誕一〇〇年特別展」を、七月十一日から九月六日の会期で開催しました。

開会式には、太宰治の長女津島園子氏、安藤宏東京大学准教授をお招きし、田村充治青森県教育委員会教育長、黒岩恭介青森県近代文学館館長とともにテープカットを行いました。



左から黒岩館長、田村教育長、津島園子氏、安藤宏氏



太宰治生誕一〇〇年特別展のポスター

本展は、「生誕の地津軽と太宰」と「太宰文学の魅力」をテーマとし、第一章「太宰治と津軽」、第二章「今なお読み継がれる太宰作品」、第三章「太宰治と青森県近代文学館」の三章に、文学地図・文学碑・文学散歩・略年譜を加えて構成しました。

旧制弘前高校時代のノートなど本展初公開の資料、代表作「斜陽」「人間失格」などの原稿をはじめ、太宰の直筆資料を中心に一四〇点を展示。県内外から八〇〇〇人を超える来館者がありました。

また、会期を同じくして青森県立美術館で開催した「太宰治と美術―故郷と自画像」は、太宰と美術をテーマにした初めての展覧会(当館共催)。文学館の展示と併せて観覧することで、太宰と青森県の風土、太宰の文学・芸術というテーマを深める機会となりました。

関連イベント

第一回文学講座 七月二十六日(日)

青森県立美術館シアター  
朗読とトーク「私と太宰」朗読『魚服記』

山根基世(ことばの杜代表)

講演「太宰治と津軽」

三浦雅士(文芸評論家)

(青森県立美術館と共催)

第二回文学講座 八月十六日(日)

青森県立図書館集会所  
「小説『津軽』の旅」

齋藤三千政(弘前ペンクラブ会長)

第三回文学講座 八月三十日(日)

青森県立図書館集会所  
「表現から読み解く太宰治」  
相馬明文(青森県郷土作家研究会理事)

日曜講座 八月九日(日)

青森県立図書館研修室  
「太宰作品との出会い」  
榎引洋一(青森県近代文学館室長)

記念講演会 七月十二日(日)

青森県立美術館シアター  
朗読「『津軽』より」  
船水もも(弘前高校三年)  
講演「太宰治自画像の文学」  
安藤宏(東京大学准教授)

(青森県立美術館と共催)

初公開の資料

「太宰治生誕一〇〇年特別展」では、平成二十一年に話題となった太宰治の旧制弘前高校時代ノート「英語」「修身」をはじめ、太宰最晩年の小説「渡り鳥」の原稿、第一創作集『晩年』刊行の頃の書簡(昭和十一年八月上旬・小館善四郎宛)、金木疎開中の書簡(昭和二十一年一月十四日・村上辰雄宛)と葉書(昭和二十二年三月二十七日・北條誠宛)、献辞入りの『晩年』初版本(鷲尾洋三宛)、浅虫温泉で遊ぶ旧制青森中学時代の太宰の写真、を初めて公開しました。その中から三点について紹介します。

一 「渡り鳥」原稿

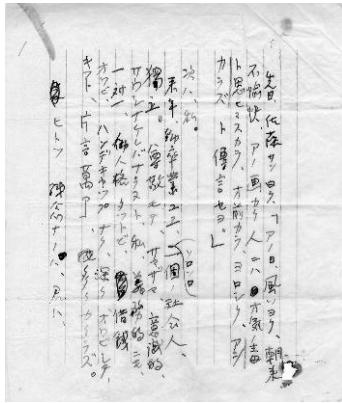


小説「渡り鳥」は、昭和二十三年四月、「群像」に発表され、太宰没後の七月、『桜桃』(実業之日本社)に収められた。「斜陽」から「人間失格」に至る時期に執筆された作品である。完成稿の存在は確認されていなかったが、布施孝氏(青森市)の協力で全四十枚を公開することになった。

「渡り鳥」は、エピグラフにダンテの「おもてには快樂(けらく)をよそひ／心には悩みわづらふ。」を置き、追従を言って金をたかろうとする青年が主人公である。「ベートーヴェンを聞けば、ベートーヴェンさ。モーツァルトを聞けば、モーツァルトさ。どつちだつていいぢやないか」という類の青年の心のつぶやきが繰り返され、現れ、場当たり的に考え方を替える軽薄な人物像が描かれる。

原稿は鉛筆で書かれ、ところどころに直しが見られる。ノンブル30の「だから僕は、老大家たちが好きになれないんだ。」の部分では、「志賀直哉」を消して「老大家たち」と書き直しており、太宰が志賀直哉を激しく批判した「如是我聞」と執筆時期が近いことを反映している。

二 太宰治書簡・小館善四郎宛



昭和十二年八月上旬(封書 便箋九枚、青ペン書)  
封筒(表) 青森市浪打六二〇

小館善四郎様  
一路平安(宛名の横に)  
封筒(裏) 千葉県船橋町五日市本宿  
一九二八 太宰治  
消印 不明

太宰治が第一創作集『晩年』を刊行したのは、昭和十一年六月、二十七歳の年であった。太宰はこれにより、有望な新人としての地位を確立するが、『晩年』出版に至るまで、生家からの義絶、心中事件、左翼運動からの転向、パビナール中毒など、人生の危機のただ中にある。『太宰治生誕一〇〇年特別展』で初公開の小館善四郎宛書簡は、その頃の太宰の苦境をよく伝えている。

「芥川賞、ほとんど確定。これも、ウソでない。(君は、アノトキ「またか」とニヤリと笑った。)ナラザキ氏、と『東陽』への私のオワビ文、読んで、内心ケイベツ。」

上野の精養軒で『晩年』の出版記念会が開かれた七月。同月末締切の「新潮」からの依頼原稿が間に合わず、太宰は、雑誌「東陽」に掲載予定の「狂言の神」を持ち去り、新潮社に渡すという(事件)があった。「東陽」に太宰を紹介した佐藤春夫は激怒し、太宰を叱責。太宰は「新潮」編輯部の檜崎勤宛に謝罪文を書き、「狂言の神」は「東陽」に戻された。この時、太宰は佐藤春夫の話から『晩年』が第三回芥川賞の有力候補になつていくとの感触を得、その賞金で多額の借財を返せると考えた形跡がある。

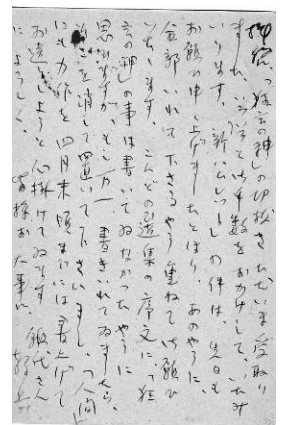
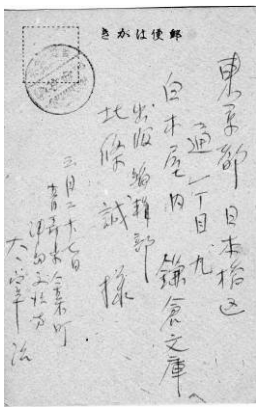
「君は、一つの仕事もしてゐない。私は、死ぬるとも悔いなき一頁(ペエジ)創りました。(略)芸術家の生活には、恋と酒と憂愁と、自棄の他に、覇気(はき)、誠実、厳酷、思索、読書、清潔、言葉、祈念など、重大のものたくさんございいます。」

「君」は、小館善四郎。太宰の姉きやうが嫁いだ小館貞一の弟で、太宰とは兄弟のような親しい関係にあり、当時、帝国美術学校の学生であった。「死ぬると悔いなき一頁(ペエジ)」とは、『晩年』のことであろう。小館に対する叱咤激励が目引く。

この書簡は、その内容から、昭和十一年八月上旬のものとして推定される。小館善四郎夫人から太宰の長女津島園子氏に託され、この度の公開に至った。全集未収録。

三 太宰治書葉書・北條誠宛

昭和二十一年三月二十七日(官製はがき 青ペン書)  
三月二十七日 青森県金木町津島文  
治方 太宰治  
東京都日本橋区通一丁目九 白木屋  
内鎌倉文庫出版編集部 北條誠様



拝啓、「狂言の神」の切抜きただいま受取りました、いろいろと御手数をおかけして、いたみいります。「新ハムレット」の件は、先日もお願ひ申し上げましたとおり、あのやうに、全部いれて下さるやう重ねて御願ひいたします、こんどの選集の序文に、「狂言の神」の事は書いておなかつたやうに思ひますが、もし万一、書きいれておましたら、そこを消して置いて下さいまし、「人間」にも力作を四月末頃までには書上げてお送りしようと思掛けてゐます 鍛代さんよろしく、皆様お大事に、  
敬具

太宰治が、疎開先の金木町から東京日本橋の鎌倉文庫出版編集部の北條誠に宛てた葉書。「今度の選集」(現代文学選集23『猿面冠者』)への要望と雑誌「人間」への寄稿(「春の枯葉」)について書いている。作家・北條誠は、川端康成の招きで鎌倉文庫の編集に従事していたが、まもなく執筆に専念するようになる。この葉書は、布施孝氏(青森市)の協力で公開された。全集未収録。

(櫛引洋一、青森県近代文学館室長)

# 今官一誕生一〇〇年展に寄せて

# 今公恵

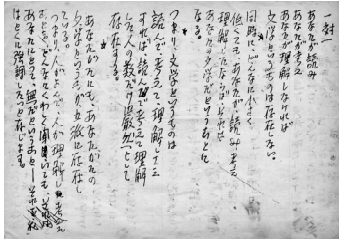
「今官一誕生一〇〇年展」のために、少しでも役に立つものはないだろうかと探していたら、「現代文学講座ノート」なるものが、見つかった。

この講座は、昭和三十四年、東京都三鷹市教育委員会が、十五歳以上の市民を対象にして開いた「秋季教養文化教室」である。

講座の依頼をうけた官一は、十月から十二月にかけて、週一回、二時間の割で「新しい小説の読み方」と題する話をしていくが、ノートは、その際に使ったものである。

それは、古びた茶色い紙袋に入れられたまま、今日までの長い年月を、押入れの奥で眠っていた。

今回の一〇〇年展がなければ、発見はもつと先になるか、あるいは私自身の高齢化によって、捨て去られる運命だったかもしれない。そう考えると、一瞬、私の背筋が寒くなった。



「現代文学講座ノート」冒頭部分のメモ (昭和34年10月)

中身を取り出してみると、紙質の悪い、赤茶けた二百字詰原稿用紙の裏表に、びっしりと几帳面な字で書きこまれていた。その字数は、ざっと四万五千字。内容が次の通りである。

- (1) 現代小説とはなにか。
- (2) 小説とはなにか。
- (3) 新しい小説とはなにか。そしてそれらを自分はどう考えているか。
- (4) それはどんなふうに見えるのだろうか。

この四つのテーマを、世紀の時代精神が生み出した、不朽の作品を、例にとりながら、あるいは、新しい小説の文体の例を示しつつ順を追って進められている。

そして、私が、このノートを一読して感じたことは、その比重が、日本の文学よりも西欧文学のほうにおかれていたということであった。

それは言いかえれば、今官一の文学形成にとつては、個人生活を作品化してみせるだけの、いわゆる「私小説」主流の日本文学よりも、伝統主義を尊重し、古典主義を骨格にしなが、新しい展開をしてきた西欧の文学に、より負う所が大きかったということなのかもしれない。

さらにつけ加えると、キリスト教をそ

の背景にもつ西欧文学を、単に感性として捉えるだけでなく、深いところで理解しようとするれば、「聖書」を識らなければならぬのだが、その点においても、東奥義塾で聖書を学んだ彼には、素地というものがあつた。

官一は、つねづね、文学に「学」という字がついているからには、文学を志す者、文学全般に精通していなければならぬ、と言っていたが、この講義ノートは、その持論をある程度、証明してみせようと思う。

およそ、人に対して何かを押しつけるというのをしない官一が、あるとき珍らしく私に勧めた唯一の本がある。七百年前に書かれたダンテの『神曲』だ。

そのとき私は、その本のページ毎に付られた、息苦しいばかりの注釈の山を一瞥して読む気を失くしてしまったが、その『神曲』の解説をノートの中に見つけた。

それは、こんな語り口ではじまる。  
 ……九歳のダンテは、五月の花の祭りの日に、父に連れられて、当時フロレンス一の大金持の屋敷に行きました。そこで初めてその家の令嬢ベアトリーチェをみたのです。彼女はダンテより一つ年下の八歳でした。彼女はのちによそへお嫁に行

って、二十四歳で死にますが、ダンテは彼女の死を聞くまで結婚しませんでした。そればかりか、この最初の出逢いにうけた感動を、一生、胸の中で育みそだてて、一生を通じて世にダンテの三部曲といわれる三つの作品を書いていきます。それは『新生』と『饗宴』と『神曲』です。これらは一貫して彼女に対する愛情が主題になっています。そしてこの順に彼の思想は成熟し大成して行っています。ダンテは五十六歳で死にますが、その年に『神曲』は完成します。つまり彼女に対する愛情が、九つの時から死ぬまでつづいたともいえるわけです……

そして、私はいま、ダンテの三部曲を讀んでみたい、という気持を起しかけている。

(こんきみえ・今官一夫人)



今官一誕生一〇〇年展のポスター

### 企画展「今官一生涯一〇〇年展」開催報告・資料紹介

「今官一生涯一〇〇年展」を、四月二十五日(土)から六月七日(日)まで開催しました。生涯一〇〇年という節目の年にあたり、数々の著作とともに、自筆資料や書画など、作品の創作過程や官一の文学観・人生観が伝わる資料を展示し、あらためて作家と作品の魅力を紹介したものです。

この企画展を機に、今公恵夫人から、「生涯一〇〇年展に寄せて」の文章とともに、新資料「現代文学講座ノート」を提供していただきました。講座「新しい小説の読み方」のために準備されたこの講義ノートは、冊子一冊と、裏表にびっしり書きこまれた原稿九十二枚からなる貴重な資料です。冒頭のメモに書かれた一文「あなたが読み、あなたが考え、あなたが理解しなければ、文学というものは存在しない」は、今官一の文学観を示すとともに、私達に今官一作品の読み方を示唆する言葉とも読みとれます。

会場には、書軸「花まぼろしの世に在らば世も幻の花ならん」(大條和雄氏所蔵)をはじめ、今官一作品のキーワードとなる言葉を記した書や色紙を展示し、作品への導入を試みました。また、津軽書房様のご協力により、会期中から、『今官一作品』上下巻の「月報」に寄せられた、井上靖、三浦哲郎、長部日出雄、水上勉、阿川弘之、近藤

東の原稿を展示できたことも大きな収穫でした。

五月十七日には、日曜講座「資料から見る今官一の魅力」(佐々木主幹)を開催しました。

展示資料の中から三点を紹介します。

#### 1 雑誌「わらはど」



「わらはど」創刊号(大正14年5月)

大正十四年四月、東奥義塾四年生の官一は、国漢文教師として赴任してきた福土幸次郎と出会う。中央で活躍していたこの詩人に魅了され、文学に憧れを抱いた官一が今井富士雄、奥田啓二、古川英雄、三上斎太郎、柳田英二、木村繁、時苗忠男ら仲間たちと創刊したのが、幸次郎の命名による雑誌「わらはど」である。

今回の企画展を機に、「わらはど」第一〜六号、第二巻第二号の全七冊を、柳田晴夫氏からご寄贈いただいた。ガリ版刷り三十四ページの創刊号は、巻頭に幸次郎の評論「マアテルリンク詩篇」を掲げ、続いて同人の創作・詩・短歌等を掲載、官一は、創作「赤い月」を発表し

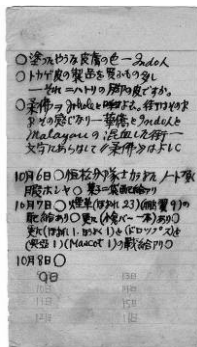
ている。中学生の手刷りによる素朴で荒けずりな誌面から、文学に憧れ自分たちで雑誌を出そう、という少年たちの意気込みが伝わってくる。官一の文学の出发点を示す貴重な資料である。

#### 2 戦艦「長門」関連資料

昭和十九年四月、官一は三十四歳で召集令状を受け、横須賀海兵団へ入団。七月、戦艦「長門」に配乗され、レイテ沖海戦に参戦した。当時の生活を克明に記録した貴重な自筆資料が、今公恵氏寄託資料として当館に保管されている。

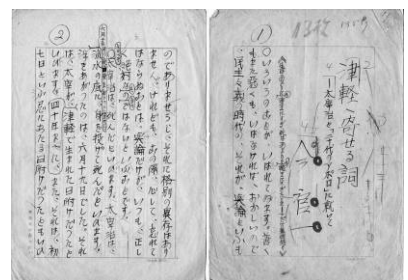
「長門配乗記」ノートは、官一が常に胸ポケットに入れ、遺書代わりに書き綴った日々の記録である。また、このノートに続くメモ「柔佛上陸記」では、ジョホール上陸の際、「柔佛古廟」(柔佛寺)の美しさに感銘を受けたことが記されている。

「柔佛古廟」に感あり。古色をつくるために苦心した民族―古くなり、朽ちればそれだけ色彩が美しさをましてくる―支那人の美意識に讃嘆す。のちに『幻花行』に登場する重要なモチーフが、この時の体験に基づくものであることがわかる。



メモ「柔佛上陸記」(昭和19年10月)

#### 3 原稿「津軽へ寄せる詞」



今官一原稿「津軽へ寄せる詞―太宰治と『二十代のアポロ』に就いて」(個人蔵)

原稿「津軽へ寄せる詞―太宰治と『二十代のアポロ』に就いて」は、昭和二十三年八月、「月刊東奥」第十巻第五号に掲載された。今回、工藤英壽氏のご協力により展示することができた。この年の六月、太宰治は玉川上水で入水自殺。特集「追悼太宰治」として、太宰ゆかりの作家が寄せた文章の中の一編であった。同じ明治四十二年、津軽生まれの二人は、作家をめざした若き日からの友人であり、同人誌「海豹」や「青い花」同人として共に活動した。太宰の死に際し、官一は「彼が、芸術家である限り、私もまた芸術家の誇を失はぬ限り、私は『太宰治』の復活を信じます。」「ほんたうに、世界でも、得がたい芸術家の一人でした。津軽は、彼の故郷にふさわしく絶対に、彼に対して、礼を失してはなりません。」と述べている。「文学の友」太宰治に対する官一の熱い思いが伝わる文章である。

(佐々木朋子、青森県近代文学館主幹)

## 父の思い出を語る時

思い出というと、どうしても私が幼少・若年の時期が頭に浮かぶが、考えてみれば父は私が十九歳の時に他界したのだから、一緒に過ごした時間の思い出は、私が成人する前に限られているということだ。

困惑の思い出も多い。それはいつも父が書生連れだったせいでもある。

だから例えば小学校の運動会でも、父、母、祖母、叔母、それに書生が加わる。そしてそれぞれがその折々に熱中しているライカのカメラやパイプ、外国製の重くて立派な双眼鏡、英国紳士のステッキやら折りたたみ椅子、どうしても欲しくて自動車修理工から取り上げたポロポロのキャップなどを身に付けて観戦に来る。つまりどうしても他の子より応援団が二人も三人も多い上に風変わり。目立って、子供心に恥かしく、照れ屋の私はそのせいで、徒競走は一等賞を貰ったためしがない。小学校に入学したてのある日、私が息せき切って帰宅して言うには、「おとう、おとう。おとうの事をパパって言うヤツがいるんだよ！」

実はこれは私には覚えがなく、父が何度も楽しそうに話していたので、思い出となってしまった。

「おとう」に「おかあ」。両親をそう呼んでいた私は、「パパ」と聞いてカルチャー・ショックを受けたのだろう。

何しろ、訪ねてくる方々も外で会う人々も、老若を問わず男性ばかりだし、お行儀の良い人達とは限らない。自宅には住み込みの書生がいて、朝に晩に離れの茶室兼書斎から大声で叱責が飛ぶ。お陰で私はすっかり男言葉遣いになってしまったのだ。

中学時代は先ず、受験票の争奪戦から始まった。受験番号の若い遅いは、合否に全く影響ないのだが、私の頼みに従って、父は前日から中学校事務所に陣取った。「1番、2番は縁起が悪いから3番を貰ってきて。」と事もなげに言う私の希望に従い、散々他の父兄と1番・2番を譲り合った末、「受験票3番」を手にした。

この時も、コーヒーを差し入れに来る人、毛布を持ち込む人、椅子、おにぎりといぶん人数が増えて、賑やかに夜を徹したらしい。この折は書生ばかりではなく、後に先輩となる方々も参加してくださった。

さて、めでたく合格し、入学式も済んだ頃、「ウチの母が受験票を貰いに来た時、アナタのお父様と一緒だったって。」と言う同級生達が現われ、しかも都会の美少女達が言うわけだから、心底冷や汗をかいた。

私が通った高校は女子高で、校舎は旧財閥の私宅を改造した建物に、立ち話しかできない中庭があった。

ある休み時間、学食へ向かう私の目に、

## 高木ノノコ

その中庭に突っ立っている父と書生が飛び込んで来た。

「ありや。またどうした事か」と、近寄って「おとう」と声を掛けると、「ああノンちゃん。探していたんだよ。今、白井先生（当時の校長の故白井浩司先生。仏文学者）と話してたんだ。ノノコは医学部や工学部への進学は望んでない、と伝えて来た。」

医学部？ という意味かといぶかしがる私に、「一緒に銀座でお茶を飲むか？」と尋ねるので、「あのね。まだ午後からも授業があるんだよ。」と応えると、トリードマークの大きな風呂敷包みを下げた書生を従えて、校門の外に消えた。要するに、成績不良で呼び出された訳だが、母は出向かず、父が書生連れで校長面談にやって来て、先手を打って、医学部や工学部は志望しないから心配するな、というような事を演説したのだ。

後に白井先生は、「僕はお父上のファンだからお目に掛かれて楽しかったよ。」と言ってくれたが、級友からは「ノノコ、呼び出されたでしょ」とか「書生さんを連れてきたパパはノノコだけだわ。」

「大きな荷物でサンタクロースのようだった。」とからかわれてしまった。

そんな代々の書生達も、今はもう居ない。父の葬儀の仕度中、前田淳一さんと北浦馨さんが、「菊岡もよくこんなバカばかり集めたものだ。」と笑った、個性

豊かな半端者達も鬼籍に入ってしまった。奈良に住むボーちゃんこと岡田芳一、いつも物静かな俵谷さんが残っているだけだ。

父を慕って青森から鎌倉へ居を移した杉山勲さんも寝たきりの闘病生活で、久しく会っていない。

そして私も今、父が没した歳に近付いてしまった。

この原稿をお頼まれた時、困ったと思いつつ思い出をさぐると、真っ先に懐しく懐しく思い出したのは、鎌倉文士でも銀座の暴れん坊達でもない、この、同じ釜の飯を食った憎めぬ面々である。彼等と共に父は、そして私も、確かな時間を過ごしてきたからである。

文末になってしまったが、青森県近代文学館館長黒岩恭介氏に深い感謝の意を捧げたい。父の生誕百年など全く脳裏になかった私に、展覧会の説明をするため、わざわざ鎌倉までお越しくださり、また、取り散らかった資料をここまで纏めて頂いた事は、私共家族にとつてこの上もない喜びである。

「菊岡久利」が埋もれてしまうことなく済むかも知れない。

ありがとうございます。御礼申し上げます。

二〇〇九年秋

(たかぎのんこ・菊岡久利長女)

## 企画展「生誕一〇〇年 菊岡久利の世界」開催報告

本企画展は菊岡久利（一九〇九弘前〜七〇東京）の生誕一〇〇年を記念して開催したものです。菊岡久利についていろいろ調査すると、まだまだ基本的なデータがまとまっておらず、菊岡久利のイメージがぼんやりしているというのが、正直な感想でした。そこで日本で初めての回顧展になることも踏まえて、菊岡久利の実像を明確に呈示することを本展の第一目標にしました。具体的には年譜を作成することと著作目録のたたき台を作成することの二つの作業です。さいわい鎌倉在住の長女、高木ノンコ氏の手元に原稿や画稿、放送台本や新聞、雑誌などかなりの量が残っていましたので、それらを整理することからこの作業ははじまりました。年譜については、当初、予感していたより詳細な、ほぼ年を追っての記述が可能となり、満足のいくものができました。また著作目録についても、ノンコ氏からの資料のおかげで、まだ完全ではないにしろ、網羅的なリストをつくることができました。所期の目的は達成できたと思っています。

展覧会が終了して、菊岡久利についていろいろ考えていると、人間菊岡久利は一つのこと集約されるのではないかと思いはじめました。それは死に逝く者、肉体的あるいは社会的な弱者に対する特別な眼差しです。菊岡久利は先に逝った詩人たちに對する挽歌や追悼エッセイを多く書いていますが、どれもすぐれた詩情を湛えています。特に中原中也、師である横光利一、また仲のよかった年長の友、竹久夢二などの思い出を綴ったエッセイは見事なエレジーだと言えます。そして、久利の本質を示すする今も印象に残る事件がありました。それは昭和三十一年の年末に起った「人犬蹂躪」問題でした。コリイ犬デッキイをめぐって飼主であった文藝春秋編集長夫妻、またその友人であった岩波書店専務から「朝日新聞」と「毎日新聞」紙上で、理不尽な言われなき誹謗中傷を被った、若い犬の訓練士夫妻を、菊岡久利は鎌倉の「土曜日曜新聞」を言論の舞台にして最後まで守り通しました。この弱者への眼差しは、考えてみれば、処女詩集『貧時交』以来、小説『ノンコのこゝろ』にいたるまで一貫して久利の詩学の根幹をなすものでした。

企画展の関連イベントとして、高木ノンコ氏に「鎌倉・銀座、気儘な日々」と題して父、菊岡久利の思い出を語っていただいたことを最後に付け加えておきます。

（黒岩恭介、青森県近代文学館館長）  
※右ページ掲載の高木ノンコ氏の文章は、会期中、展示室内の入口付近に掲げさせていただいたものです。

## 企画展「鳴海要吉 没後五〇年」開催報告

十月十日（土）から十一月二十三日（月）まで、企画展「鳴海要吉 没後五〇年」を開催しました。（菊岡展との同時開催）会期中、展示室内には鳴海要吉の二男・竹春氏の著書『父の思い出』の中から『新緑』の創立の頃と私』の章の一部パネル化し掲げさせていただきました。また御遺族の協力により、要吉が主宰した「新緑」を、改題後の「短歌文学」や「緑風」、「緑野」を含めて、合計十七点展示することができました。

実物を見るのが困難な「新緑」を、断続的にはありますが、大正十五年の創刊号から終刊直前の昭和十六年九月号まで並べられたことは大きな成果でした。小説や童話も掲載する文芸誌から全国に同人を持つ口語歌誌へという変遷の様子、また要吉が昭和七年頃から提唱した清算自由律の内容を、来観者の方にお伝えできたのではないかと思います。

新資料「鳴海要吉個人雑誌新緑」（第一号〜第三号）を公開できたことも成果の一つです。昭和八年四月から七月にかけて、「新緑」から改題後まもない「短歌文学」と並行する形で発行された雑誌で、昨年春に古書店で発掘されました。どのような経緯で創刊されたものなのか、三号に続く号はなかったのかなど、今後解明の余地があると思われまます。

図書については、残念ながら処女詩集『乳涙集』を展示することは叶いません

んでしたが、それ以外の要吉の著書は全て揃えることができました。ローマ字書きの詩集『FUJI NI KAERE』や『Usio no Oto』はもとより、『国定ローマ字小字読本』など要吉が発行したローマ字の教本三冊を公開できたのも収穫でした。

直筆資料では、当館所蔵の書軸・色紙に加え、秋田雨雀記念館の協力で色紙「諦めの旅ではあつた／磯の先の／白い燈台に／日が映して居た」を、また弘前市立郷土文学館の協力で書軸「磯がある／松原がある／寺がある／あゝこの愁い／どうしていゝか」を展示することができました。取り分け感慨深かったのは、御遺族から提供いただいた自筆本二冊です。『乳涙集（再編）』は要吉が晩年に処女詩集を再刊する意志を抱いていたことを、『土にかえれ（新生文字版）』は要吉が自ら考案した一音一字の新生文字を自由自在に使いこなしていたことを物語る資料でした。

この他、晩年の要吉と文通のあった相馬正一氏からは「陸奥新報」紙上で全文初公開された、要吉の回想風原稿（平成二十一年十月七日〜九日掲載）のカラーコピーを、『うらぶる人―口語歌人鳴海要吉の生涯』の著者・高橋明雄氏からは要吉に関する写真資料を多数御提供いただきました。この場を借りて関係各位に厚く御礼申し上げます。

（竹浪直人、青森県近代文学館主事）

企画展「新収蔵資料展」開催報告

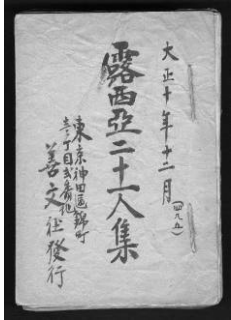
平成二十二年一月十六日から三月十二日の会期で「新収蔵資料展―ロシア文学者 菊池仁康―」を開催しました。板柳町出身の菊池仁康（一八九五～一九六七）は、板柳銀行、青森貯蓄銀行の頭取、青森銀行取締役、菊屋百貨店社長などを歴任した実業家として知られ、また、詩人福士幸次郎の地方主義運動に参加するなど、福士の支援者としても知られています。

その菊池が、若き日にニコライ露西亜神学校、日露協会学校、東京外国語学校（現東京外国語大学）で学び、大正から昭和にかけてロシア文学の翻訳に情熱を傾けていたことを伝える資料が、菊池慎一郎氏（菊池仁康長男）から当館に寄贈されました。

本展では、菊池仁康訳『露西亞二十一人集』（大正十一年一月・善文社）、



『露西亞二十一人集』外函



稿本『露西亞二十一人集』

菊池の翻訳五編収録の『ゴオルキイ全集』第五巻（大正十一年一月・日本評論社）、『プウシユキン全集』第一巻、第二巻（昭和十一年九月、十二年一月・ボン書店）とそれらの原稿など、一一七点の資料を展示。菊池のロシア文学者としての側面を中心に紹介しました。

二月七日には菊池慎一郎氏と齊藤美奈子氏（菊池仁康三女）を迎え、日曜講座を開催しました。

また、併設コーナー「詩人・村次郎」では、北島一夫氏から寄贈いただいた村次郎の原稿・書簡・詩集などを展示しました。『忘魚の歌』『風の歌』の猷辞入り初版本や、未刊行詩集「海村」の原稿等を紹介するとともに、村次郎と弘前の詩人たちの交流を示す資料、詩誌「草原」「偽画」など、十五点の資料を展示しました。

（櫛引洋一、青森県近代文学館室長）

第八回青森県近代文学館川柳大会開催

三月七日、第八回青森県近代文学館川柳大会を青森県立図書館集会所で開催し、九十五名が作品を競いあいました。

「川柳トーク 一句の読み方」では、工藤青夏氏、高瀬霜石氏、野沢省悟氏の座談会形式で、小林不浪人、後藤蝶五郎から現代川柳までの作品鑑賞を行いました。「初心者には、句を作るためにすぐ良いヒントをいただけたい」「目からウロコが落ちた。心で読む川柳に難解句はない」ということがよくわかった」と、

参加者から大好評でした。大会の特選句は次のとおりです。

宿題「新」松山芳生選  
鉛筆が転がる新しい角度

工藤青夏

宿題「新」沢田百合子選  
新月が昇るまた子を生むために

高橋星湖

宿題「分ける」三浦蒼鬼選

夫婦浪浪切り取り線が抱く微熱

内山孤遊

宿題「分ける」葉閑女選

これがボク分けようがないボジとネガ

齋藤紀

宿題「情」岩淵黙人選

両手から零れるものを見えています

高瀬霜石

宿題「情」横澤あや子選

火の女情念抱いて樹になった

野口一滴

宿題「燃える」秋田朴人選

燃え残る過去があるから生きられる

三浦蒼鬼

宿題「燃える」村井規子選

人ひとり燃やし青空澄んでいる

野沢省悟

席題「息」Sin選

ぼくの歩幅にぼくが合わなくなってくる

高瀬霜石

席題「息」岩崎眞里子選

ぼくの歩幅にぼくが合わなくなってくる

高瀬霜石

パネル展開催

開催六年目にして、初めて県外でもパネル展を実施することができました。会場は以下の通りです。

◇「青森県近代詩のあゆみ」パネル展  
太宰の宿ふかうら文学館 4月5日～18日

◇「太宰治」パネル展  
太宰の宿ふかうら文学館 5月19日～  
7月12日

県観光物産館アスパム 6月24日～  
7月31日

七戸高等学校 7月18日～19日

◇「太宰治生誕一〇〇年」パネル展

弘前工業高等学校 10月16日～18日

弘前中央高等学校 10月19日～21日

弘前高等学校 10月21日～23日

弘前南高等学校 10月26日～28日

東奥義塾高等学校 10月28日～30日

聖愛中学高等学校 11月2日～5日

下関短期大学（山口県） 11月4日～29日

弘前学院大学 11月5日～7日

青森東高等学校 11月9日～11日

青森高等学校 11月11日～14日

青森南高等学校 11月16日～18日

野辺地高等学校 11月19日～21日

三沢高等学校 11月24日～26日

八戸高等学校 11月26日～28日

◇「太宰治生誕一〇〇年」パネル展

「随欄南と正岡子規」パネル展

県総合学校教育センター 1月6日～13日



資料寄贈者紹介

次の方々から資料を寄贈していただきました。ありがとうございました。今後とも当館へのご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

平成二十二年二月二十八日現在

図書・資料受け入れ報告

平成二十二年三月(二十二年二月)

- アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌの美―カムイと創造する世界―』
青森県歌人懇話会『青森県歌集 第52集』
青森県環境生活部 県民生活文化課 県史編さんグループ『グラフ青森 No.358 他 図書・雑誌三冊』
青森県現代俳句協会『青森県現代俳句年鑑 2009年版』二冊
青森県詩人連盟『県詩連詩集 岬二〇〇九年版』
青森県新幹線交流推進課『あおもり教育旅行ガイドDVD2009』他図書三冊
青森県総合社会教育センター『学遊トピアあおもり2009』他二冊
青森県俳句懇話会『新青森県句集 第二十集』他一冊
青森県文芸協会『句集 古希』他図書・雑誌・特殊資料百七十三点
青森県立郷土館『妖怪展 神・もののけ・祈り』二冊
青森県立美術館『太宰治と美術』他一冊
青森市市民文化生涯学習課 市史編さん室『新青森市史 別編4 自然』
あおもり草子編集部『あおもり草子』通巻一九二号 他一冊
青森大学 青森短期大学附属図書館『書物の森』第20号 二冊
あしかげ社『第十二回むつ・下北小中学生誌上俳句大会作品集』二冊
尼崎市総合文化センター『第64回尼崎市芸祭 文芸作品集』
新谷ひろし『雪天句集 第4集』他雑誌二十冊

- 有島記念館『有島三兄弟―それぞれの青春』
泉鏡花記念館『番町の家』他一冊
市川市文学プラザ『宗左近と市川の詩人たち』他一冊
一茶記念館『小林一茶百八十三回忌全国俳句大会作品集』
伊東宣治『冬の散歩道』他三冊
井上直哉『テレビドラマ 遊星人M 作品解題』
茨城県常総市・節のふるさと文化づくり協議会『土のふるさと 第12回長塚節文学賞入選作品集』
いわき市立草野心平記念文学館『草野心平の書画展』他一冊
蝦名石蔵『句集 遠望』
大阪国際児童文学館『第25回ニッサン童話と絵本のグランプリ 創作童話・絵本入賞作品』
大高喜久江『桜桃忌関係資料二点』
大谷晃一『大谷晃一 著作集 第五巻』他一冊
大間啄木会『啄木大間説の研究』他三冊
おかじょうき川柳社『おかじょうき』第11巻 第12号 二冊
岡田芳一『貧時交』他図書・雑誌・特殊資料十四点
小山純夫『密造者』第七十六集
学習院大学史料館『ミュージアム・レター No.10』
『風花随筆文学賞』実行委員会事務局『第12回風花随筆文学賞入賞作品集』
神奈川文学振興会『大乱歩展』他一冊
河北文化事業団『第58回 平成20年度河北文化賞』
かまくら春秋社『福井桂子全詩集』
鎌倉市鐫木清方記念美術館『鐫木清方挿絵図録』
鎌倉文学館『鎌倉からの手紙 鎌倉への手紙』
鎌田慧『ルボ、絶望の日本列島』痛憤の現場を歩く 韓国語訳
川村慶子『緑の笛豆本の会刊行物等 図書・雑誌百八十七冊』
菊池慎一郎『菊池仁康関係資料三十五点 企画集団ぶらずむ』アソベの森いわき荘 かわら版』第25号

- 菊池寛記念館『紙芝居がやって来た』
北川山人『風霊の舞い』
北九州市立文学館『横山白虹―上衣を肩にして歩く―』他一冊
北九州市立松本清張記念館『神々の乱心』他二冊
北島一夫『生涯の歌』他図書・雑誌・特殊資料四十八点
京武久美『句集 二月四日』
日下部元慰智『今官一原稿「ねぶた禁止令」』
久慈さきみ代『孤独な少年ジャーナリスト 寺山修司』
群系の会『群系 第19号 他五冊』
薫風発行所『薫風俳句 第五集』二冊
群馬県立土屋文明記念文学館『夢みる女性誌』他三冊
『幻花忌』の会『花幻の世に在らば』二冊
小岩尚好『ページのなかのせんだい―杜の文学風景―』
高知県立文学館『幕末維新の土佐 探訪 図会』
光文社『小説宝石』第42巻 第4号 他二冊
神戸大学山口誓子学術振興基金運営委員会『連歌俳諧関係研究文献総目録』
こおりやま文学の森資料館『第十回三汀賞入選句集』
国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター『平成20年度 博物館に関する基礎資料』
国立歴史民俗博物館『れきはくにいこうよ 2007』他三冊
児島倫子『詩集 甘溜り』
後藤正人『秋田雨雀の啄木研究の意義』
小諸市教育委員会『第十五回 小諸・藤村文学賞入選作品集』
今公恵『今官一関係特殊資料四点』
さいたま文学館『田舎教師が愛した景色』他一冊
斉藤純子『合同歌集 続・茜の道』
斎藤理生・松本和也『新世紀 太宰治』
齋藤茂吉記念館『齋藤茂吉記念歌集 第三十五集』
榊弘子『おおもや』25号
櫻田俊子『太宰治研究―女性独白体の成』

- 立と展開
桜庭和浩『窓邊雜草』他四冊
佐々木達司『文芸あおもり』第一五二号 他一冊
佐々木靖章『学友会雑誌』第18号 他一冊
佐藤暉一『詩集 存在のカテゴリイ』
佐藤勇治『夢』他図書・雑誌四冊
清水義和『寺山修司の時代』他一冊
謝里法『紫色の大稲垣』
酒類童子社『川村康夫作品集 遺言言葉』
昭和館『移動教室年鑑 体験学習』他図書一冊、パンフレット二部
新宿歴史博物館『新宿・時代の貌―カストリ時代・文士の時代―』
杉並区立郷土博物館『悠々として急げ―開高健と昭和―』
正進社『新・国語の便覧』
全国俳句山寺大会実行委員会『第52回 全国俳句山寺大会兼題投句集』
仙台文学館『井上ひさしの世界』他一冊
川内まごころ文学館『夏目漱石―漱石山房の日々―』
川柳触光舎『川柳人生 60年大友逸星川柳人生 50年高田寄生木 記念句集』二冊
外海吟社『各駅停車 汽車の旅』二冊
高市順一郎『樹の中の鐘』
高木治夫『太宰治書簡』
高木ノンコ『菊岡久利関係図書・雑誌百四十六冊』
高瀬霜石『川柳作家全集』
高橋明雄『歌集 山姥』第9巻 第7号
高山市役所『平成十九年度 高山市近代文学館調査・研究報告書』他一冊
竹浪和夫『文藝』第13巻 第3号 他図書・雑誌三十六冊
太宰治銅像建立実行委員会『故郷の風に抱かれて』(DVD)
太宰文学研究会『追悼 長篠康一郎―太宰治に捧げた生涯―』
田辺聖子文学館『第1回田辺聖子文学館ジュニア文学賞受賞作品集』
谷村茂夫『銀漢』創刊号 他四十九冊
調布市武者小路実篤記念館『生きたこと』高田博厚と実篤』他図書一冊、パンフレット二部
津軽書房『風流博物誌』他二冊

- 津軽に学ぶ会―『津軽学 5号』
- 東奥日報―『詩と思想二〇〇二年』他図書・雑誌四百三十五点
- 東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター―『日本最古の古鳥居群は語る』他四冊
- 徳島県立文学書庫―『寂聴の「場所」展』
- 豊島文香―『川柳句集 愛惜』二冊
- 豊橋市文化市民部文化課―『丸山薫・ランプの灯りに集う』第5号
- 十和田市文化協会―『十和田市野外文芸館全国公募入選作品集合本』二冊
- 仲嶺眞武―『四行連詩集 首の上の石』他一冊
- ながらみ書房―『幾山河』二冊
- 奈良岡功三―『現代詩の作り方研究』他図書・雑誌四冊
- 成田本店―『波』青春と読書 各十二冊
- 『図書』十一冊 計三十五冊
- 南條世子―『いのちの籠』第11号
- 日外アソシエーツ―『戦後詩誌総覧⑤ 感受性のコスモロジー』
- 日本近代文学館―『日本近代文学館年誌 資料探索5』
- 日本現代詩歌文学館―『食卓と詩歌』他図書一冊、パンフレット一部
- 日本能率協会マネジメントセンター―『手帳300%活用術』
- ニューズ・ライン―『新潟粹人』第3号
- 練馬区文化振興協会―『五味康祐―文学と音楽に生きて―』
- 野沢省悟―『正午の風景』他三冊
- 姫路文学館―『安野光雅が描く 繪本平家物語の世界』
- 兵頭勉―『火を継ぐもの―小林多喜二』
- 平野敏―『詩集 顔』
- 平山栄蔵―『私の「感想」ノート』
- 弘前市立郷土文学館―『太宰治という人』
- 弘前大学附属図書館―『官立弘前高等学校 校資料目録』
- 弘前潮音会―『歩みの記録』
- 弘前ペンクラブ―『小野正文を偲ぶ』他パンフレット一部
- 福井次郎―『カサブランカ』はなぜ名画なのか』
- 福井緑―『歌集 あをみどろ』
- 福岡市文学館―『黎明の歌詩人・加藤介春』

- 福士りか―『歌集「リ」の系譜』
- 福田正夫詩の会―『新しい風』第15号
- ふくやま文学館―『福山地方の詩と童謡』他一冊
- 藤木俱子―『句集 浙浙』二冊
- 藤寿々夢―『太宰治の素顔』
- 冬木久―『詩集 百本の薔薇』
- プレジデント社―『プレジデント Family』第4巻第11号
- 文化環境研究所―『アジア太平洋地域博物館 国際交流調査報告書』
- 文学史探究の会―『近世文学研究』創刊号
- 文化書房博文社―『寺山修司 海外公演』他四冊
- 文京ふるさと歴史館―『実録! 漫画少年誌』
- 平凡社―『別冊太陽 日本のこころ159 太宰治』
- 北海道立文学館―『吉増剛造 詩の黄金の庭―北への挨拶―』他図書二冊、リーフレット三部
- 本田逸夫―『陸羯南の思想の魅力について』
- 前橋文学館―『沈黙の語り部 まえはしの文学碑』他一冊
- 町田市民文学館ことばらんど―『森村誠一 展―拡大する文学』
- 松本一美―『津島源右衛門書簡』
- 松ヶ丘保養園―『幸田の裾』CD保存版二点
- 松本和也―『昭和十年前後の太宰治』他一冊
- 松本侑子―『小説宝石』第42巻第7号 他図書・雑誌四冊
- 松山市立子規記念博物館―『子規と紅葉―ことばの冒険―』
- 圓子哲雄―『散文詩集 馬の耳は馬耳ならず』
- 三浦雅士―『資本主義はニヒリズムか』
- 三上強二―『文士の風貌』他図書・雑誌・特殊資料二十点
- 三上邦康―『山の歌』他三冊
- 岬の分教場保存会―『第七回 二十四の瞳 岬文壇エッセ―募集 受賞者作品集』他一冊
- 三鷹市山本有三記念館―『解説 三鷹市山本有三記念館』

- みちのく北方漁船博物館―『北前船復元 うちのく丸建造と帆走の記録』
- 宮崎ヒサ子―『宮崎ヒサ子百句集 流れつく』
- 椋鳩十文学記念館―『全国読書感想文入賞作品集』
- 室生犀星記念館―『装幀の美 恩地孝四郎と犀星の饗宴』
- もがみせつこ―『夕ばえの唄』二冊
- 木曜会―『ドキドキがとまらない』
- 安田保民―『壁の花』初版帯
- 柳田晴夫―『わらばど』他図書・雑誌十七冊
- 山浦誠―『今官一原稿「軍艦正月」』他六点
- 山田親弘―『続・津軽の民謡』
- 山梨県立文学館―『樋口一葉と甲州』他一冊
- 山本有三記念館―『太宰治の肖像』
- 山本龍生―『詩譚「青い花」と太宰治』
- 山谷文子―『句集 銀沙』二冊
- 横須賀美術館―『手のひらのモダン コドモノクニと漫画家たち』
- 吉田嘉志雄―『父の思い出』他図書・雑誌・特殊資料五点
- 吉野恵―『零』
- 麗人社―『美術屋・百兵衛 第8号』他二冊
- レマン『大人の休日』編集部―『大人の休日倶楽部ジパング』第2巻第1号
- ワイズ出版―『男の花道 小國英雄シナリオ集』
- 早稲田システム開発―『社内研修資料』VOL.31 他五冊
- 渡部晋行―『日本現代文学全集 月報99』
- 渡部芳紀―『東京人』第23巻第14号

**定期刊行物(平成二十一年度分)**

- 青嶺俳句会―『青嶺』
- 青森アララギ会―『青森アララギ』
- 青森県環境生活部県民生活文化課 県史編さんグループ―『青森県史だより』
- 青森県教育厚生会―『三潮』
- 青森県郷土作家研究会―『郷土作家研究』
- 青森県川柳社―『川柳誌「ねぶた」』
- 青森県長寿社会振興センター―『あおもり長寿セミナー』「あすなる倶楽部」
- 青森県文芸協会―『文芸あおもり』
- 青森古今短歌会事務局―歌誌「青森古今」
- 青森美術音楽鑑賞会―『A B O K』
- 青森文学会―『青森文学』
- あしかげ社―『蘆光』
- 尼崎芸術文化協会―『芸文あまがさき』
- 新谷ひろし―『雪天』
- 伊藤一郎―『明治大正俳句雑誌レポート』
- 井上靖記念文化財団―『伝書鳩』
- 井上靖研究会―『井上靖研究』
- 大阪国際児童文学館―『国際児童文学館紀要』
- 大佛次郎記念館―『おさらぎ選書』
- 鬼發行所―『鬼』
- 小山正見―『感泣亭秋報』
- 海光發行所―『詩誌「海光」』
- 飾画の会―『飾画』
- 風詩社―『詩誌「風」』
- 金沢文化振興財団―『研究紀要』
- 川内俳句会―『ひこばえ』
- 菊池寛記念館―『文藝もず』
- 北の会―『きたのやかた』
- 北の街社―『北の街』
- 国原社―『歌誌「国原」』
- 黒艦隊―『俳誌「黒艦隊」』
- 薫風發行所―『俳誌「薫風」』
- 群馬県立土屋文明記念文学館―『風』文学紀要2009』
- 群緑短歌会―『群緑』
- 勁草社―『勁草』
- 月刊弘前編集室―『月刊弘前』
- 現代文学史研究所―『現代文学史研究』
- 越谷市立図書館 野口富士男文庫―『野口富士男文庫』
- さいたま文学館―『文芸埼玉』
- 湖社―『詩誌「湖」』
- 此岸俳句会―『俳誌「此岸」』
- シモノー『Fishing Cafe』
- 紫明の会―『紫明』
- ジャパン・ポエトリー・レビュー事務局―『ジャパン・ポエトリー・レビュー』
- 渋柿園俳句会―『俳誌「渋柿園」』
- 樹氷群發行所―『俳誌「樹氷群」』
- 昭和館―『昭和のくらし研究』
- 書肆 青樹社―『誌と創造』

- 書肆 北奥舎―「北奥氣圍」
- 真朱の会―「真朱」
- 全国文学館協議会事務局―「全国文学館協議会紀要」
- 川柳触光舎―「触光」
- 川柳ゼミ 青い実の会―「青い実の会」青い実」
- 川柳塔みちのく―川柳誌「川柳塔みちのく」
- 川柳ひらなひ―川柳誌「川柳ひらなひ」
- 外海吟社―「外海」
- 高田寄生木―川柳誌「北貌」
- たかんな発行所―俳誌「たかんな」
- 丹青社―「fansen.net」
- 千田和美―川柳誌「風紋」
- 潮音社―「潮音」
- 調布市武者小路実篤記念館 解説シート「もっと知りたい武者小路実篤」
- 東京都江戸東京博物館―「東京都江戸東京博物館研究報告」
- 胸乱詩社―詩誌「胸乱」
- 徳島県立文学書道館―「文芸とくしま」
- 徳島県立文学書道館研究紀要 水脈」
- 豊巻つくし―川柳誌「うまつり」
- 十和田かばちえつぼ川柳吟社―「川柳かばちえつぼ」
- 中原中也記念館―「any」
- 新美南吉記念館―「研究紀要」
- 日本現代詩歌文学館―研究紀要「日本現代詩歌研究」
- 日本民主主義文学会弘前支部―「弘前民主文学」
- 梅光学院大学―「梅光文芸」
- 俳人協会―「俳句文学館紀要」
- hashomado―「本のパークキング」
- 八甲田川柳社―「川柳八甲田」
- 波止場の会―「波止場」
- はまなす発行所―「はまなす」
- 萬緑青森県支部―俳誌「未来」
- 萬緑発行所―「萬緑」
- 姫路文学館―「姫路文学館紀要」
- ひら川吟社―俳誌「ひら川」
- 平野敏―「平野敏詩誌 魚信旗」
- 弘前詩塾―「弘前詩塾」
- 弘前川柳社―川柳誌「川柳林檎」
- 弘前大学国語国文学会―「弘前大学国語国文学」
- 弘前潮音会―短歌誌「すべーす」

- 弘前文芸協会―「文芸弘前」
- 弘前ペンクラブ事務局―「弘前ペンクラブニュース」
- 福井愛―詩誌「くうき」
- 福井―「ム」
- 福田正夫詩の会―「焰」
- 藤田晴央―「孔雀船」
- ふだん記津軽グループ―「ふだん記津軽」
- 文化環境研究所―「Cultivate」
- 文藝軌道の会―「文藝軌道」
- 文芸誌 風の森編集室―「風の森」
- 文団―「遙」
- 北狄社―「北狄」
- 北海道開拓の村―「北海道開拓の村研究紀要」
- 北海道開拓の村研究報告」
- 本郷七日会―俳誌「地塩」
- 前橋文学館―「前橋文学館研究紀要」
- 松丘保養園慰安会―「甲田の裾」
- 松本皎―「蒼笠亭・愚庵・古道人研究」
- 湊川神社事務所―「湊川」
- 無名群社―「務名会」
- 「群山」青森短歌会―「朔天」
- 明治大学学芸員養成課程―紀要「MUSEUM STUDY」
- 安田保民―「個」
- 山田尚―「亜土 第二次」
- 山梨県立文学館―「紀要 資料と研究」
- 悠短歌会―「悠」
- 襟俳句会―「襟」
- 吉田健治―「短詩サロン」
- 若菜の会―「若菜」
- 《館報》
- 青森県総合社会教育センター―「所報響」
- 有島記念館―「有島記念館」
- 石川近代文学館―「石川近代文学館ニュース」
- 石坂洋次郎文学記念館―「石坂洋次郎文学記念館新聞」
- 泉鏡花記念館―「鏡花雪うさぎ」
- 一茶記念館―「一茶記念館だより」
- 井上靖記念館―「井上靖記念館報」
- いわき市立草野心平記念文学館―「いわき市立草野心平記念文学館報」
- いわき市草野心平記念文学館報―「いわき市草野心平記念館年報」
- 岩手県立埋蔵文化財センター―「わらび」

- 大阪国際児童文学館―「国際児童文学館 REPORT」
- 大島博光記念館―「大島博光記念館 ニュース」
- 大原富枝研究会―「山査子」
- かごしま近代文学館 かごしまメルヘン館―「かごしま近代文学館・メルヘン館館報」
- 「年報」(平成20年度)
- 神奈川文学振興会―「神奈川近代文学館」
- 「神奈川近代文学館年報2008年(平成20年度)」
- 金沢文芸館―「さんざろ」
- 軽井沢高原文庫―「軽井沢高原文庫通信」
- 北九州市立松本清張記念館―「松本清張記念館館報」
- 「中高生読書感想文コンクール特集号」
- 「友の会だより」
- 虚子記念文学館―「虚子記念文学館報」
- 熊本近代文学館―「熊本近代文学館報」
- 高知県立文学館―「高知県立文学館 ニュース 藤並の森」
- 「こおりやま文学の森資料館」
- 「こおりやま文学の森通信」
- さいたま文学館―「館報」
- 埼玉文芸家集団―「埼玉文芸家集団会報」
- 斎藤茂吉記念館―「斎藤茂吉記念館年報」(平成20年度)
- 坂の上の雲ミュージアム―「坂の上のミュージアム通信 小日本」
- 佐藤春夫記念館―「佐藤春夫記念館だより」
- 昭和館―「昭和館館報」
- 杉並区立郷土博物館―「杉並区立郷土博物館年報 平成19年度版・研究紀要 第17号」
- 世田谷文学館―「世田谷文学館 ニュース」
- 全国文学館協議会事務局―「全国文学館協議会会報」
- 仙台文学館―「仙台文学館 ニュース」
- 台東区立中央図書館 池波正太郎記念文庫―「池波正太郎記念文庫報」
- 鷹山宇一記念美術館友の会―「七戸町立鷹山宇一記念美術館友の会会報」
- 立原道造記念館―「立原道造記念館」
- 調布市武者小路実篤記念館―「館報 美愛真」
- 壺井栄文学館―「壺井栄文学館だより」
- 東京都江戸東京博物館―「江戸東京博物館 NEWS」
- 藤村記念館―「藤村記念館だより」

- 東北大学史料館―「東北大学史料館だより」
- 東北大学総合学術博物館―「ニュースレター Omnivivens」
- 徳島県立文学書道館―「徳島県立文学書道館 ニュース こゝろのは」
- 十和田市立新瀬戸記念館―「十和田市立新瀬戸記念館だより」
- 中原中也記念館―「中原中也記念館館報」
- 新潟県立歴史博物館―「年報(平成19年度)」
- 「年報(平成20年度)」
- 日本近代文学館―「日本近代文学館」
- 日本現代詩歌文学館―「日本現代詩歌文学館館報 詩歌の森」
- 日本新聞教育文化財団―「NIE ニュース」(「ニュースパーク」より)
- 日本ユネスコ協会連盟―「世界遺産年報2010」
- 俳人協会―「俳句文学館」
- 原阿佐緒記念館―「原阿佐緒記念館だより」
- 姫路文学館―「手帖 姫路文学館」
- 「姫路文学館年報(平成20年度)」
- 弘前市立郷土文学館―「北の文脈 ニュース」
- 福岡市文学館―「文学館倶楽部」
- 文化環境研究所―「文環研レポート」
- 北海道立文学館―「北海道文学館報」
- 「平成19年度年報」
- 前橋文学館―「前橋文学館報」
- 松山市立子規記念博物館―「子規博だより」
- 松山市立子規記念博物館年報」
- 三浦綾子記念文学館―「みほんりん 三浦綾子記念文学館館報」
- 三鷹市山本有三記念館―「三鷹市山本有三記念館館報」
- 棟方志功記念館―「棟方志功記念館だより」
- 室蘭文学館の会―「むろらん港の文学館通信」
- 明治大学学芸員養成課程―「年報 MUSEOLOGIST」
- 盛岡てがみ館―「平成20年度 盛岡てがみ館館報」
- 山梨県立文学館―「山梨県立文学館館報」
- 吉川英治記念館―「草思堂だより」
- 早稲田システム開発―「MAPPS Press」(敬称略)

ギャラリートーク実施

青森県近代文学館の常設展示作家十三人とその作品について、文学館解説員によるギャラリートークを実施しました。開催日とテーマは以下の通りです。

- ① 10月24日 高木恭造 『津軽の人々』
② 10月31日 三浦哲郎 『白夜を旅する人々』
③ 11月21日 福土幸次郎 詩集『展望』
④ 12月5日 佐藤紅緑 『少年讃歌』
⑤ 12月12日 石坂洋次郎 『陽のあたる坂道』
⑥ 12月19日 太宰 治 『富嶽百景』
⑦ 1月16日 北島八穂 『ジロウ・ブーチン日記』
⑧ 1月23日 長部日出雄 小説集『善意株式会社』
⑨ 1月30日 葛西善蔵 『雪をんな』
⑩ 2月20日 今 官一 『少年 太宰治』
⑪ 2月27日 寺山修司 『愛さないと愛せないの』
⑫ 3月6日 秋田雨雀 『三人の百姓』
⑬ 3月13日 北村小松 『太陽の丘』



ギャラリートークの様子

青森県近代文学館 今週のお宝

「昨年度の六月から続いていた『毎日新聞』青森版のページにおける所蔵資料紹介の企画、県近代文学館 今週のお宝」は、平成二十一年十二月二十五日を以て連載を終了しました。以下、八十一回目から最終回までのタイトルの一覧を掲げます。なお、これらの記事内容は当館ホームページの「名品コーナー」で見ることが可能です。

- 81 雑誌「むつの子」
82 太宰治 原稿「家庭の幸福」
83 平野甲吉 グラフィック作品 鎌田慧著作の装丁から
84 棟方志功 三宅正太郎宛書簡
85 今官一 色紙「花まぼろしの世にあらば世も幻の花ならん」
86 丹羽洋岳 色紙「水上の榎ヶ峰早やも雪白みとらえし岩魚さびて細りぬ」
87 小山内時雄 歌集『若き日の巡礼』
88 菊岡久利 原稿「私の処女について」
89 今官一「文学を見る」構想執筆メモ
90 佐藤紅緑 書幅「天子呼来れども花に酔臥せり」
91 写真・佐藤一英と福土幸次郎
92 菊岡久利 小説集『怖るべき子供たち』
93 今官一「今官」作品 上下巻
94 船水公明 色紙「五月とならばかのかつこうも来て啼かむ山といろのみどりの中に」
95 秋田雨雀 書みつばらの集はこにわれは耳あててはるかにも聞く春のおしずれ
96 詩雑誌「日本詩人」第5巻第2号
97 平田小六「囚はれた大地」
98 江渡秋嶺 原稿「家庭の非道徳教育」
99 太宰治 小山清宛 葉書
100 太宰治 草稿「お伽草紙」
101 向井潤吉・石坂洋次郎「仮眠する石坂洋次郎」
102 船水清 詩稿「無限」
103 太宰治 旧制青森中学校「校友会誌」第34号
104 鷹樹壽之介『哲學の反動と哲學抹殺』
105 木村助男 方言詩集『土筆(へべこ)』
106 鳴海要吉 ローマ字詩集『TUTU NI KAREE』
107 与謝野寛、晶子 書簡(大正14年10月11日付・坂本元太郎あて)
108 菊岡久利『省時文』
109 長部日出雄 原稿「また見ぬ故郷」
110 鳴海要吉「鳴海要吉個人雑誌新緑」
111 福土幸次郎 詩人協会解散意見書
112 建部綾足『俳諧源氏』
113 北島八穂 原稿「萌えろ青森童話」
114 松岡辰雄 歌碑拓本
115 鈴木喜代春 原稿「けがづの子」
116 棟方志功 谷崎潤一郎宛書簡
117 北村小松 詩集『忘魚の歌』

館務日誌

- 4月24日 太宰治生誕百年記念オーブニングセレモニ(五所川原 黒岩館長 榎引室長)
4月25日 企画展「今官一 生誕一〇〇周年展 開会」村上シゲ氏(今官一 妹)来館
5月13日 今官一展日曜講座(佐々木主幹、あおもり検定)一夜漬け講座(八戸・榎引室長)
5月17日 東奥日報音読教室25名見学、板柳北小学校68名見学
5月18日 青森中央短期大学附属第一幼稚園49名見学
5月19日 中央文化保育園13名見学
5月20日 青森中央短期大学附属第一幼稚園46名見学
5月21日 特殊資料棟(28)
5月25日 岡上文学の会15名見学
6月5日 川柳社入社9名見学
6月7日 松本侑子氏来館
6月14日 文学資料調査員会議
6月15日 市町村立図書館等職員初任者研修会15名見学
6月16日 太宰治生誕百年記念フォーラム(五所川原・榎引室長)
6月17日 原・榎引室長
6月19日 高等学校図書委員会研修大会60名見学
6月20日 平川市交通安全母の会39名見学、三八五観光タクシー乗務員10名見学
6月30日 「太宰治生誕一〇〇年特別展開会式」(一フカット)津島園子氏、安藤宏氏、田村充治教育長、黒岩館長、来賓「小野才八郎氏、高木治夫氏、館田勝弘氏、米田省三氏ほか、山梨県立文学館職員3名来館
7月8日 あすなろマスターカレッジ人文科学コースI(青森・佐々木主幹)II 9/5、III 9/12、IV 9/26 実施
7月11日 田澤陽氏(太宰治)来館
7月20日 文学館評議委員会、鯉ヶ沢高校90名見学
7月22日 平川市図書館文学散歩青森(五所川原・佐々木主幹)、文学館見学27名、市町村立図書館等職員初任者研修会52名見学
7月23日 津軽地吹雪会23名見学
7月24日 第一回文学講座(山根重正氏、三浦雅士氏)
7月26日 東郷克美早稲田大学名誉教授来館
7月31日 弘前学院大学35名見学
8月1日 あすなろマスターカレッジ人文科学コース(弘前・榎引室長)
8月9日 特別展日曜講座(榎引室長)
8月16日 第二回文学講座(齋藤三政氏)
8月19日 金木観光物産館職員8名見学(20日)
8月26日 大分中央高校教諭1名見学
8月27日 中堅職員研修生30名見学

青森県近代文学館報 第二十七号

発行日 平成二十二年三月二十日

編集発行 青森県近代文学館【青森県立図書館内】

〒030-0184 青森市荒川字藤戸一 一九七

電話 〇一七三九二五七五

http://www.plhb.net/pref.aomori.jp/top/museum/

- 8月28日 県内教育事務所職員30名見学
8月29日 山内祥史神戸女学院大学名誉教授来館
8月30日 第三回文学講座(相馬明文氏)
9月1日 大人塾(大阪)25名見学
9月4日 国語科コンピュータ活用講座(五所川原・榎引室長)、文学館見学14名、青森市観光ボランティアガイド研修会39名見学
9月6日 松本清張記念館職員来館
9月6日 「太宰治生誕一〇〇年特別展開会」
9月9日 鶴田町立水元中央小学校52名見学
9月25日 あすなろマスターカレッジ展示実習26
10月9日 高木ノゾミ氏(菊岡久利長女)一行来館
10月10日 企画展「生誕一〇〇年菊岡久利の世界」
10月13日 「鳴海要吉没後五〇年」開会、菊岡久利展文学講座(高木ノゾミ氏)
10月14日 高橋明雄氏(鳴海展協力者)来館
10月14日 竹浪和夫氏(鳴海展協力者)来館
11月11日 鎌倉文学館職員来館
11月14日 青森高校図書習センター公開講座(青森 榎引室長)、松本清張記念館友の会7名見学
11月15日 菊岡久利展文学講座(黒岩館長)
11月18日 平内町立山口小学校16名見学、青森中央学院大学による公開連続講義(青森・榎引室長)
11月20日 全国文学館協議会資料情報部会(松山市竹浪主事)
11月21日 鳴海要吉展文学講座(竹浪主事)
11月23日 菊岡久利展「鳴海要吉」展開会
12月18日 青森市立三内小学校95名見学
1月16日 「新収蔵資料展」ロシア文学者菊池仁康(併設「ナー」詩人村次郎)開会、菊池慎一郎(菊池仁康長男)夫妻、斎藤美奈子氏(菊池仁康三女)来館、弘前学院大学地域総合文化研究所講演会(弘前・竹浪主事)
2月7日 日曜講座(榎引室長、一戸晃氏(菊池展協力者)来館)
3月2日 つがる文庫の会40名見学
3月3日 仙台文学館職員来館
3月4日 浄土宗東北地区保護司会研修会(青森・榎引室長)
3月7日 第八回青森県近代文学館川柳大会開催